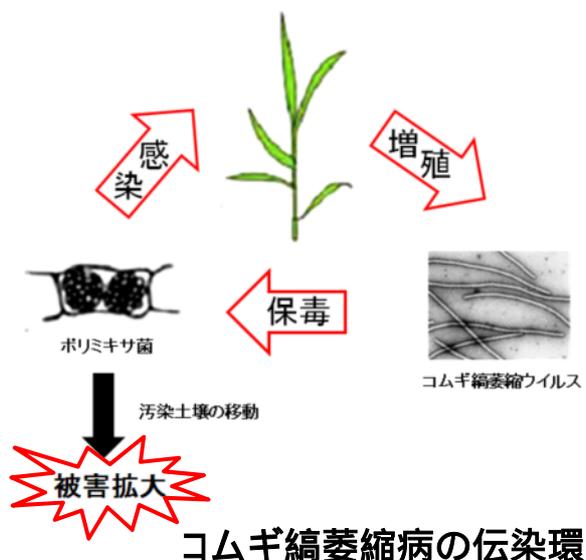


コムギ縞萎縮病が遺伝子診断で 高感度に判別できます

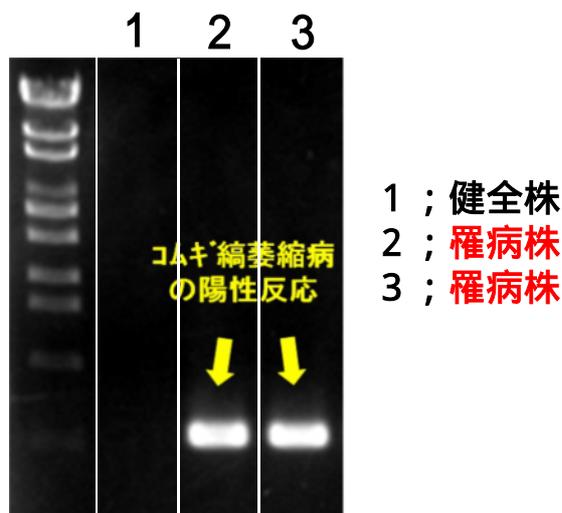
コムギ縞萎縮病は土壌中の原生動物ポリミキサが媒介するウイルス病で、全国的に発生が確認されています。葉の黄化、かすり状の退色、モザイク状といった症状が現れ、生育が抑制されて収量が著しく減少します。県内で栽培されている「農林61号」、「タマイズミ」はこの病気に弱く、また土壌伝染性であるため、発生の拡大を防ぐためにも発生ほ場の早期の特定が重要になります。そこで遺伝子診断により高感度に判別できる技術を開発しました。



コムギ縞萎縮病の病徴

検出手順

- 小麦葉 (1cm x 1cmを2枚)
- RNA抽出 (5時間)
- cDNA合成 (1.5時間)
- PCR反応 (2.5時間)
- 電気泳動 (1時間)



(研究成果)

- ・ 2日程度で判定できるRT-PCR法による遺伝子診断技術を開発しました。
- ・ 従来のELISA法に比べて高感度で本病の診断を行うことができます。
- ・ 本病の感染ほ場を早期に特定することにより、後期追肥によって被害を軽減させたり、農業機械による汚染土壌の移動を未然に防ぐことができます。